



中世の京都

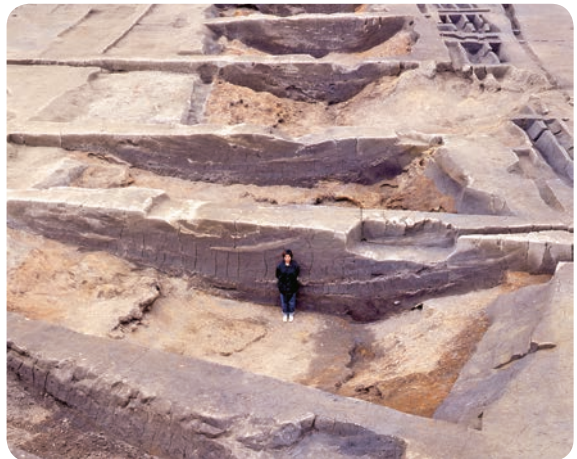
はじめに

平清盛による平氏政権の成立から豊臣秀吉による天下一統までを中世と呼んでいます。この時代は武家政権が成立して政治権力が分散化し、荘園などの土地支配や人々の支配・従属関係も重層化した時代でした。この萌芽は、白河法皇による院政が始まった11世紀後半に現れますので、院政期は中世初期と考えることができます。また、南北朝の騒乱を境に中世前期と中世後期に区分することができます。ここでは、やしき屋敷・きょかん居館・しろ城とふんぼ墳墓・きょうづか経塚をキーワードに、この時代を特徴付ける遺跡を概観していきます。

屋敷・居館・城

久世郡久御山町の^{さやま}佐山遺跡の居館は中世初期に成立しました。巨大な濠で囲まれた1町四方を占めると推定されるこの居館は、古代にこの地にあった荘園の管理施設である^{まんどころ}政所を前身として造られたと考えられます。福知山市の^{うわがいち}上ヶ市遺跡では大溝に囲まれた中世前期の居館が見つかりました。これらの居館の主は、荘園を寄進して荘官の地位を得た開発領主、もしくは荘園領主が現地に派遣した荘官と考えられ、寄進地系荘園の盛行とともに現れる遺跡といふことができます。

相楽郡精華町^{むくのき}椋ノ木遺跡では遺構の分布状況の変化から、11世紀までは建物が



佐山遺跡の濠

中世の京都

散在している景観であったのが、12世紀中頃には^{じょうり}条里型の方格地割に沿った屋敷地の中に建物がまとまり、屋敷地の周囲は溝で囲まれるという景観に変化したことがわかります。屋敷を囲む溝などからは、中国製の陶磁器や東海地方産の陶器鉢など、遠隔地産のさまざまな遺物が出土します。この頃から、手工業生産の増大と流通の発展により焼物などの物資が大量に遠隔地まで運ばれることが多くなります。棕ノ木遺跡は、木津川左岸の相楽郡と綴喜郡の境界にあったと想定される川湊を押さえ、木津川舟運とかわわりを持っていたと考えられます。

これらの屋敷地は濠や溝と柵で囲まれていることが多いのですが、



棕ノ木遺跡の溝に囲まれた屋敷地



大内城跡の居館建物跡

高い^{どるい}土塁を築いて防御を固めているものはありません。大規模な土塁を築くようになるのは、中世後期のことです。この変化は福知山市の^{おおうちじょう}大内城跡でよくわかります。

大内城跡は東西に延びる尾根上に立地しています。中世前期には低い土塁と柵で囲まれた屋敷地の中に数棟の建物が^{すけもと}建ち並んでおり、平資基や池大納言^{よもり}平頼盛を領家とした^{むとべのしょう}六人部荘を管理する荘官の居館と推定されています。この居館は中世後期になると高い^{こしくるわ}土塁と腰曲輪を備えた^{やまじろ}山城に変貌します。この変化は国人に成長した在地領主層が地域

の有力農民層を被官化し、軍事力を背景に周辺の国人と合従連衡を繰り返していたこの時代を表すものです。鎌倉時代までの遺物が大量に出土するのに対して、南北朝時代以降の遺物がほとんど出土しないことも居館から城への変化を示しています。このように、調査を行っても遺物があまり出土しない山城が多く、平時は麓で生活していたと考えられますが、中世後期の平地居館跡はほとんど見つ

かっていません。一方で、綾部市の平山城館跡や舞鶴市の^{おおまたじょう}大俣城跡は、多量の遺物が出土することから、戦時に逃げ込むだけではなく、山城で日常生活が営まれていたものと推定されます。平山城館跡では、大きな平坦面のある^{くるわ}曲輪に大小3棟の建物が建ち並び、白磁皿や土師器皿が出土する住居用の建物と青磁や^{てんもくちやわん}天目茶碗などが出土する茶室などに使い分けられていたと推定されます。また、1段高い曲輪には、礫敷きの礎石建物があり、甕が多く出土することから倉庫などに使われていたようです。

平山城館跡の西側斜面では14条もの^{たてぼり}豎堀が見つかりました。豎堀は城に攻め上る敵兵が斜面に沿って横方向に移



平山城館跡の畝形の豎堀群



大俣城跡

中世の京都

動するのを防ぐものですが、これを連続して掘ることで防御機能を高めています。大俣城跡は小規模な山城ですが、屈曲する虎口とその前後の城道、曲輪の両端に取り付く竖堀など、城全体の構造がよくわかりました。これらの山城の最盛期は、明智光秀による丹波攻略が行われた頃です。

墳墓・経塚

中世初期から前期の屋敷地の一面には、しばしば墓が営まれます。この時期は、大きな親族集団である「氏」から直系家族である「家」が成立してゆく時期で、屋敷墓と呼ばれるこれらの墓はそれぞれの「家」の始祖の墓と考えられます。椋ノ木遺跡で見つかった屋敷墓のひとつには、白磁椀2点と土師器皿10点が副葬されていました。同時期の他の例では椀と4～5点の皿を副葬する例が多く、この墓は2倍の副葬品を持っていたこととなります。この時代には墓に埋葬される人はまだ少なく、遺体の多くは河原などに運んで処理されたと考えられますが、鎌倉時代になると墓に埋葬される人が多くなり、共同墓地が成立します。福知山市大道寺跡では尾根の基部に営まれた経塚と先端の総供養塔に挟まれた空間に合計26基の火葬墓群が見つかりました。京田辺市小田垣内遺跡では、戦国時代の土塁の中から石仏4基が立ったままの状態で見つかりました。石仏は石で囲まれた室町時代の墓の上に墓標として立てられていたのですが、戦時に急いで城が築かれたため、そのまま土塁に埋められたようです。与謝郡与謝野町の福井遺跡や地蔵山遺跡では、このような中世の墓地の姿を今も見ることができます。

大道寺跡の墓地の入口では、経典が残っていたことや全国で初めて竹製経筒の存在が確認されたことで特筆される大道寺跡経塚が見つかりました。この経塚は、墓地の成立に当たって墓地を結界し供養する目的で営まれたと考えられます。

経塚とは、釈迦入滅後、正法・像法の時代を経て、仏法が正し

く行われなくなる末法の世が来るとする^{まっぽうしそ}末法思想に基づき、^{みろくげしよ}弥勒下生の時まで経典を伝えようとしたものです。

日本では永承7（1052）年が末法元年と信じられており、藤原道長が寛弘4（1007）年に造営した奈良県の^{きんぶせん}金峯山経塚を最初として全国に流行します。11世紀末には追善供養を目的とした経塚が現れ、12世紀後半以降は経典の保存という目的と共に墓との結びつきを強めます。

京都府は全国的に見ても多くの経塚が営まれた地域で、特に平安京周辺と丹後地域に集中しています。平安京周辺の経塚には京都市の鞍馬寺経塚や

^{はなせべつしよ}花背別所経塚のように多彩な埋納品を伴う経塚が見られます。これらは平安京の貴族を願主として12世紀を中心に造営されました。一方、丹後地域の経塚は鏡を埋納する例があるものの全体的に埋納品は乏しい傾向です。営まれる時期も12世紀後葉からで、^{たかだやま}大道寺跡経塚や同じく福知山市の^{たてあな}高田山経塚のように墓地に伴って経塚が見つかる例が散見されます。丹後地域を中心に、^{よこあな}丹波北部・但馬地域には、地面に掘った^{たてあな}豎穴の側面に^{よこあな}横穴を穿って土師器筒形容器などに納めた経典を埋めるという独特の構造のものも分布します。大道寺跡経塚もこの型式の経塚です。宮津市のエノク経塚では、ひとつの塚にこのような経塚が4基営まれていました。（森島康雄）



土壘に埋められた石仏（小田垣内遺跡）



宮津市エノク経塚